



この1年の取り組み



2015

はじめに



東海テレビ放送株式会社
代表取締役社長

内田 優

本報告は4年前の「ピーかん問題」を教訓に、放送事業を軸とした地域への社会貢献、岩手県をはじめ東北地方の被災地支援、放送倫理の向上などをめざし、2014年7月から1年にわたり弊社が実施した取り組みをまとめたものです。

このたび弊社は、向こう3年間の目標を定めた経営計画を新たに策定しました。基本理念としてジャーナリズムを守り続けること、有事の際のライフラインとして放送の継続を最優先することなどを掲げ、テレビの社会的使命をより強く意識したものとしました。

そしてこの春には、17年にわたりご覧いただいた夕方ニュース「スーパーニュース」を「みんなのニュースOne」に衣替えしました。確かな取材源から得た情報を、より正確に、より早く、より分かりやすく、皆さまにお届けできるよう心掛けてまいります。

インターネットの著しい進展により放送環境は大きく変わり、地上波放送には厳しい向かい風が吹いています。この逆風を追い風に変えられるよう、全社で知恵を出し努力していく所存です。そして皆さまのご期待にお応えできるよう、一層精進してまいります。

引き続き、叱咤激励いただきますよう、よろしく願い申し上げます。

<ビジョン> 愛され、信頼される地域最良のテレビ局

- <基本理念>
1. 放送の持つ公共性、公益性を深く自覚し、社会的使命感と高い倫理観を持って職務を遂行する。
 1. ジャーナリズムを堅持し、表現の自由を守り、正確で迅速な報道を通じて視聴者の知る権利にこたえる。
 1. 良質な番組を制作、イベントや事業を通じて、市民生活に役立つ情報と健全な娯楽を提供し、地域文化の向上、福祉の増進に努める。
 1. ライフラインとしての使命を自覚し、放送継続を最優先に、地域の安全・安心に寄与する。
 1. 放送局として自主・自立を守るため経営の安定を図る。

- <基本方針>
1. 安全な制作体制のもと、自社制作番組を充実させ、積極的に情報発信するとともに、視聴率の強化に努める。
 1. コンプライアンスの推進と放送倫理教育を徹底した上で、プロフェッショナルな放送人の育成を進める。
 1. 東海テレビ、グループ会社、外部スタッフのコミュニケーションを密にし、活力ある、行動し、挑戦する職場作りに努める。
 1. 開局60周年に向け、会社のブランド力向上を目指す。
 1. 災害時の放送事業継続のため、放送計画案を徹底させるとともに、設備等の強化を図る。
 1. 震災被災地への支援を継続する。
 1. 大型設備投資をはじめとする支出と総収入を精査し、体質強化を図る。

C O N T E N T S

| | |
|----------------------------|----------------------------|
| 01 はじめに | 15 視聴者からのご意見 — 社外モニター懇談会から |
| 03 地域社会に役立つ放送局として | 16 この1年の主な取り組み |
| 11 被災地支援の取り組み | 17 第三者意見 II |
| 12 コンプライアンス・放送倫理意識の醸成を目指して | 18 おわりに |
| 14 第三者意見 I | |

地域社会に役立つ放送局として

東海テレビでは、ニュース、情報、バラエティ、ドラマなど、多様な番組の放送と各種イベントの開催、災害時のライフラインを担うことで、地域社会の発展に力を注いでまいります。また、出張授業や社内見学などを実施することで、皆様と身近に交流できる場を広げ、東海テレビを知っていただく機会を随時設けています。

1 放送を通じた地域社会貢献

17年ぶり! フルモデルチェンジ!!

「みんなのニュースOne～東桜一丁目テレビ～」

<月-金>16:49-19:00放送

報道部 奥村 信利



毎日流れるテレビのニュース番組、本当に必要とされているのでしょうか?今の時代、みんなが最初にニュースを知るのはケータイやパソコン、インターネットのサイトやSNS(ソーシャルネットワーキングサービス)です。テレビニュースは“速報性”という最大の存在意義を失いつつあります。

「じゃあ、そもそも世の中の役に立ってるの?」「それって、画面の向こう側に届いてる?」

東海テレビの夕方ニュースの“フルモデルチェンジ”は、実に17年ぶり。せっかくなので、「そもそも」から問い直すチャンスにしようと議論を重ねました。

“ひとつになる”を信じて!

看板を掛けかえるのも、17年ぶり。単なる番組タイトルということだけでなく、スタッフみんなで掲げられる“旗”を作ろうと考えました。部内全員がそれぞれの思いでアイデアを出しました。自然に導かれていったのが「One」。ナンバー One、オンリー One、そして、視聴者と制作者が同じ目線・価値観を共有したい、“ひとつに”なりたい!という思いを込めました。スタッフも心をひとつにして新しいスタートです。

“ニュースの常識”を疑い、脱却しよう!

東海テレビ報道の矜持は“取材力”。力を合わせればどんなメディアにも負けない!という自負は連綿と受け継がれています。一方で、少し足りないのが“表現力”。せっかく取った情報でも、画面の向こう側に伝わってこそ価値が生まれます。そもそも選ぶニュースの題材、情報、原稿、映像も、もっともっと、さらにもっと、受け手の立場で考えられるはず!その努力を怠らないと改めて誓いました。例えば…映像だけに頼っていた編集方針を変更しました。

スタジオでイラストや模型、時には寸劇だって…分かりやすく伝えるための創意工夫が「One」の特色です。

とにかく、超ローカル至上主義、で行こう!

ローカル主義を超える“超ローカル至上主義”。でも、原点回帰です。

どんな出来事でも「この地方からみた日本は?」「この地方からみた世界は?」「あのニュースがこの地方で起きたら?」に改めてこだわることになりました。例えば、全国ネットのトップを飾るようなビッグニュースも、できる限り地元の方々に意見を聞きたい。そこで、街頭インタビューを、ニュースの主役にしました。

みんなが“伝え手”になる、なれる時代!

かつては、街頭で、お茶の間で、みんなで“見る”ものだったのが…インターネットの進化で、誰もが情報を発信する“伝え手”になれる時代。テレビはアナウンサー、タレント、著名人、だけでなく、みんなが伝える時代が到来したのです。「こどもニュース」というコーナーをスタートさせました。子どもの視点でニュースを紹介しようという企画です。子どもキャスターのギモンを大切に、自分で調べてもらうこともします。

子どもは自分の意見をしっかり持っています。近い将来、もっと多くの子どもキャスターに登場してもらいたいと考えています。

視聴率こそ、すべて?

「見てもらってナンボでしょ!」その通りです。「結局ニュース番組なんてどれも同じでしょ!」そう言う意見もあるかも知れません。

その中で選んで毎日の生活習慣にしてもらうには…。ホントに“ちょっとしたこと”なんだと思います。

どんなニュース・話題でも、やさしく、正しく、丁寧に。アイデアに知恵を絞りつつ、マジメに、誠実に、真摯に、そして“ちょっとしたこと”に悩みながら、テレビに向き合います。

3年目に突入しました

「スイッチ!」

〈月-金〉9:50-11:15放送

情報制作部 山本 茂樹



「お城や棚田、日本の原風景を鳥の目線で見てみたら?」「400年前の街道を歩き続けたらどんな発見がある?」。

「スイッチ!」は3年目に入りました。知られざる地域の魅力はまだまだあるし、知っている事でも目線を変えれば新たな魅力が見つかります。グルメやお出かけなどの生活情報はもちろん、「ご朱印巡り」や「まちの達人さん」など、街の歴史や伝統の技にスポットをあてるコーナーにも力を注ぎました。また東北の復興を支援する放送も継続しました。3月11日の放送では、マギー審司さんが故郷の宮城県気仙沼市に里帰り。震災から4年を迎えた復興の現状や、海の幸が楽しめる「復興屋台村」などの観光情報を紹介しました。東海地方の人が被災地に関心を持ち続け、東北へ足を運びたいくなる情報を伝えることが、番組が担うべき復興支援と考えます。20代のスタッフが大勢いる若いチームです。

放送に携わる責任感と番組づくりの楽しさを共有し、地域の方に親しまれ信頼される番組を目指します。

おかげさまで400回

「スタイルプラス」

〈毎週日曜日〉12:00 - 13:45放送

情報制作部 伊藤 芳人



「スタイルプラス」は、3月に放送400回を迎えました。これまで、東海地方のモノや人などの地域情報を発信してきたほか、台風などの有事の際に、いち早く災害情報をお伝えしてきました。このほかにも番組では、取材が難しく、埋もれてしまいがちな地域の活動にも目を向け伝えてきました。そのひとつが、東日本大震災の特別企画。震災と地域の関わりを考えるきっかけになればと発生の年から毎年放送しています。今年は、宮城県から愛知県豊根村に避難してきた被災者が4年ぶりに故郷へ帰る様子を取材。被災者に無償で宿を貸している豊根村の住民や、仕事場の同僚、自治活動をともにする友人などの話を集め、豊根村の人々が被災者をどう支えてきたかを伝えました。被災地から離れていても地域として人としてできることがある。そうしたメッセージをこの地方の人々に届けることができたのではないかと思います。

スタイルプラスは、10月から10年目に突入します。今後も地域の動きにしっかり目を向け発信していく、この基本姿勢を守っていききたいと思います。

楽しみを愉しんで

「ぐっさん家～THE GOODSUN HOUSE～」

〈毎週土曜日〉18:30 - 19:00放送

制作部 嶋崎 悠介



“ぐっさん”こと山口智充さんの名古屋暮らしを垣間見る「ぐっさん家」。東海地方の様々な場所に出かけ、ぐっさん独自の目線で人とふれあい、体験し、そしておいしいグルメを楽しむ。有名観光地はもちろん、慣れ親しんだ商店街や下町、ちょっとした路地裏へも。ぐっさん流の楽しい旅を提案し、地元の魅力を発信しています。

昨年秋のわんだほ感謝祭の公開収録には「グット兄さん」が登場。視聴者の皆さんと一緒に何かを楽しみたい…、チーム・ザ・グッドサンハウスのそんな思いから生まれたグット兄さん。ステージでゲストとともにオリジナルの歌と踊りを披露し、客席の子どもたちと一体となって盛り上げました。この公開収録番組のサブタイトル「～栄にともだち大集合!!～」は、“ゲストが皆ぐっさんのともだち”という意味ですが、実際に集まってくださった“視聴者の皆さんもぐっさん家のともだち”という意味でもあります。「ぐっさん家」は今年、13年目を迎えています。これからも視聴者の皆さんや東海地方とのつながりに感謝しながら、“楽しみを愉しんで”いきます。

地域の子どもたちとともに24年

「すくすくぽん！」

〈毎週土曜日〉6:45-7:00放送

制作部 伊藤 真保



今年で24年目となる幼児番組「すくすくぽん!」。放送開始当初より大幅にリニューアルし、現在はオムニバス構成で放送していますが、一貫して大切にしていることがあります。それは、キャラクターとともに幼稚園保育園を訪れ、子どもたちとふれ合うこと。当初はおなじみの体操対決で、現在はリズム体操で、子ども達は元気に踊っています。かつて参加した方が、親や幼稚園の先生となって応募して下さったケースもあり、地域を大事にすることはもちろん、それを持続することの大切さを痛感しています。

いつの時代も、子どもは音楽に合わせてからだを動かすことは大好きなようで、とても元気です。その姿に、私たちスタッフも大いに楽しませてもらっていますが、これこそが、このコーナー、ひいては番組の最大のポイント。子どもたちは笑い、その笑顔で大人が元気になる番組であり続けるため、目一杯頭をやわらかくして制作に励む日々です。

“自由”の中に見える 子どもと大人の信頼関係

ドキュメンタリー

「先生のいないようちえん」

2015年3月28日(土)9:55-10:50放送

制作部 伊藤 真保



番組の舞台は、名古屋市天白区・相生山にある「風の子幼稚園」。ここでは、子ども達はどこで何をするのも自由。園舎の屋根をドタバタ走り回ったり、髪も顔も泥だらけで遊んだり、包丁でジャガイモを切ったり…。つい手を差し出したり、「危ない!」と声を出したりしてしまいがちなところ、取材チームは、耐えに耐えた1年でした。

「風の子幼稚園」での活動は、子ども達の思いが最優先されます。園長先生をはじめとしたスタッフの皆さんは、危険をともなう作業も傍らで見守るだけ。でも、大人が信頼して任せていることを肌で感じるからか、大げがにつながるような事故はこれまで起きていないそうです。

「今」を思い切り楽しむ子どもたちと、揺るぎない信念で彼らに向き合う園長先生。「風の子幼稚園」では、大人も子どもも皆、自分の尺度で生きていました。

“人生は自分のもの!大人も子どもも「したいやりたい」尊重していいんだよ!”彼らからももらった大切なメッセージを、一人でも多くの視聴者の方と共有できていれば幸せです。

地元の快挙を余すことなくお伝えしたい！

ノーベル賞特番

「青がくれた贈り物～名古屋ノーベル賞物語～」

2014年12月29日(月) 24:55 - 25:55 放送

報道部 岩佐 雄人

御嶽山の噴火から間もない去年10月、東海地方に飛び切りの明るいニュースが飛び込んできました。名古屋からまたノーベル賞。それも、師弟コンビで！

赤崎勇教授・天野浩教授のノーベル物理学賞受賞は、青色LEDという身近な研究成果と、天野教授の飾らない人柄もあって、またたく間に全国の注目となりました。

地元放送局としてこの快挙を余すことなくお伝えしたいと、日々のニュースに加え、特別番組を制作しました。取材班は、授賞式があるスウェーデン・ストックホルムまで密着取材。天野教授は「人の役に立つ研究を」と、世界の若者に呼びかけました。

研究の舞台となった名古屋大学では、自由闊達な雰囲気の中、赤崎教授から天野教授、そして次代を担う学生たちに、研究者魂が受け継がれていく様子も取材しました。

名大ゆかりのノーベル賞受賞者はこれで6人。遠くない日に生まれるだろう「7人目」の喜びを、視聴者の皆さんと分かち合う日が楽しみです。

地元の災害情報を丁寧に伝える

Super NEWS スペシャル

「火山とともに生きる～御嶽山噴火から3カ月～」

2014年12月27日(土) 9:55 - 10:50 放送

報道部 風隼 隆宏

岐阜県と長野県にまたがる御嶽山。2014年9月27日に噴火し、57人もの命を奪いました。57人は、長野県で見つかったものの、その多くは東海三県の方々でした。「遺族の

声も含め、御嶽山の噴火は、私たちがしっかりと伝える必要がある」そんな思いで、特番の準備にあたりました。

放送は、噴火から3カ月後の12月27日。直前には衆議院の解散・総選挙もあり、御嶽山の噴火のニュースが他局や新聞で伝えられることは少なくなっていました。御嶽山と地元・長野県木曾町などの状況、さらに遺族の思い、先進地の取り組み…。特番は、噴火の影響でオープンを見送ったスキー場にもご協力をいただき、そこから全編中継でお伝えしました。さらに、御嶽山の山頂で妻を失った男性も、取材に応じてくれました。

被害に遭った方々の、心の傷が消えることはありません。それだけに、皆さんの言葉はどれも重く、貴重なものばかりでした。

2015年になり、箱根山で火山活動が活発になるなど、日本では、地震とともに火山にも注目が集まってきています。たとえ住んでいる場所の近くに火山がなかったとしても、旅行先などで噴火に遭遇する可能性も十分にあります。気象庁の対応が少しでも早くなれば…。多くの人たちが火山について知っていれば…同じような被害を二度と起こさないことも十分可能です。それが遺族や被害を受けた方々の思いでもあります。

そのために私たちができること、ありきたりですが、伝え続けることです。今後も特番に限らず、御嶽山の噴火について様々な角度から取り上げていきます。



視聴者の皆さんと一緒に ドラゴンズを応援!

「ドラHOTプラス」

〈毎週土曜日〉17:00 - 17:26 放送

スポーツ部 太田 貴久



「ドラHOT+(プラス)」では、この地方最強のスポーツコンテンツのひとつであるドラゴンズにこだわった番組作りをしています。「ドラゴンズが盛り上がりれば東海地区も盛り上がる」と考え、ファンと一緒にドラゴンズを応援しています。2015年の4月4日には、番組をより身近に感じてもらうため、新たな企画を実施しました。視聴者の皆さん178人を招き、峰竜太さんら番組出演者と一緒にスタンドの内野席からドラゴンズの戦いを応援する「ドラHOT+」応援シートです。「野球中継の副音声」と「ドラHOT+」の音声を聞きながら熱い声援を送ってもらっています。さらにこの春ナゴヤドームに「ドアラカフェ」をオープンし、より幅広いファンの開拓を目指しています。ドラゴンズファンがより楽しめ、そして新たなドラゴンズファンを増やすべく、番組だけでなく、地域の皆さんと直接触れ合う機会を作ることで、東海地域を盛り上げていきます。

地元から世界をめざす アスリートを追いかけて

「2020への約束」

2015年3月1日(日) 24:40 - 25:10 放送

スポーツ部 五十嵐 悠介

5年後に日本で開かれる世界のスポーツの祭典。その舞台を目指す、地元出身の若きアスリートに密着するドキュメン

タリー番組「2020への約束」を2015年3月1日に放送しました。

第一弾として取り上げたのは、愛知県岡崎市出身でバレーボール男子の日本代表・石川祐希選手でした。

石川選手は、2014年、愛知・星城高校をバレーボール界史上初となる2年連続高校タイトル三冠(高校総体・国体・春高バレー)へと導きました。この時既に「10年に一人の逸材」とまで言われていた石川選手。身長191センチ、スパイク時の最高到達点は日本代表の平均よりも高い345センチ。恵まれた身体と圧倒的な才能を持つ彼を、より多くの人たちに知ってもらいたい、そして、将来全日本のエースとして活躍が期待される石川選手の成長を追いかけたい、との思いで取材を続けています。

彼は高校を卒業して大学生になり、そして18歳で日本代表に選ばれ、今や日本代表の中心選手にまで成長を遂げています。また、去年12月には大学生として日本人初となる、世界最高峰リーグ・イタリアセリエAのチームに所属と、その才能は世界へと羽ばたきました。

これからも石川選手をはじめ、地元出身のスポーツ選手を発掘し、“2020”をより身近に感じていただけるよう、今後も様々なアスリートを追いかけていきます。



石川祐希選手

2 その他の社会貢献

さまざまなイベントを通じ 楽しさと潤いある街づくりを

事業部 田中 達也

事業部では、「辻井伸行 with ヴァシリー・ペトレニコ指揮
ロイヤル・リヴァプール・フィル」を始めとしたスーパークラ
シックコンサート、金魚を主役に江戸情緒と現代テクノロ
ジーを融合させた「アートアクアリウム展」の他、ミュージカ
ル「ミスサイゴン」や落語の祭典「大名古屋らくご祭」など、
様々な趣向の文化イベントを開催しました。

前年に続いて開催された「アートアクアリウム展」は、26万
6000人余りの皆様にご来場いただきました。またスポーツ
関連では、45回目を迎えたゴルフトーナメント「トップ杯
東海クラシック」と「マンシングウェアレディース東海クラ
シック」を開催した他、9回目を迎えた愛知県市町村対抗の
駅伝競走大会、「愛知駅伝」を開催しました。また新たな
取り組みとして、スイーツを食べながらランニングを楽しむ
「全国スイーツマラソンin愛知」を開催し、約7400人のラン
ナーにご参加いただきました。

事業部では今後も、皆様楽しんでいただけるイベントを
数多く開催していきたいと考えています。



全国スイーツマラソンin愛知

東海地方の福祉文化発展のために 東海テレビ福祉文化事業団

事務局長 相沢 一中

社会福祉法人東海テレビ福祉文化事業団は、地域の社会
福祉の向上を目的に、開局20周年にあたる1979年、東海
テレビが母体となり設立いたしました。企業・団体や個人
からお寄せいただく大切な寄附金などの浄財を基に、障
がい者・高齢者・児童の福祉や災害援助など8つの分野で、
助成を中心とした活動を展開しています。

36年目にあたる2014年度は、お年寄りや子ども、からだの
不自由な方々を対象にした各種イベントへの助成など、
76件の事業を実施しました。

このうち、事業団の中心的な取り組みである「愛の鈴事業」
では、「愛の鈴 しあわせキャンペーン」と「愛の鈴 年末助け
合い運動」の募金活動を実施しました。そして、東海3県の
4か所の福祉施設に対し、軽自動車「愛の鈴号」を寄贈しま
した。また「東海テレビひまわり賞」では、身体のハンディを
克服して社会で自立し頑張っている東海地方の4人の方々
を顕彰しました。さらに東日本大震災の義援金として、内閣
府に363万円余りを、寄託しました。

東海テレビ福祉事業団はこれからもこれら活動を通して、
この地域の福祉文化の発展に尽くしてまいります。



「愛の鈴号」寄贈



タイ・チュラロンコン大学の大学院生のみなさん



「スイッチ!」のスタジオセット見学



報道フロアの見学

身近な交流を大切に

社内見学・出張授業などの取り組み

コンプライアンス推進部 梅村 育宏

東海テレビでは、番組の放送やイベント以外にも、地域への社会貢献活動の一環として、社内見学や出張授業を随時実施し、直接皆さんと交流する機会も設けています。主な取り組みをご報告します。

①タイの大学院生が来社

日時 2015年 5月22日(金)

タイのチュラロンコン大学コミュニケーション学部の大学院生16人が、会社見学のため東海テレビを訪問しました。学生の皆さんには情報番組「スイッチ!」のスタジオセット、報道部のフロアとニューススタジオなどを見学してもらいました。この日、学生の皆さんには宿泊先であらかじめ「スイッチ!」を視聴してもらったあと実施された見学会。色とりどりの雑貨が並んだセットに興味を示していたほか、番組の内容を説明するためにMCの宮沢桃子アナウンサーがスタジオに現れると、学生たちは矢継ぎ早に質問をするなど、お互いに交流を深める場となりました。

②「キャスターの仕事」について中学校で講演

日時 2015年 6月4日(木)

名古屋市千種区の若水中学校で、3月まで「スーパーニュース」のキャスターを務めた報道局の中村昌秀解説委員が、キャスターの仕事について講演しました。2年生の総合学習「自分の生き方を考えよう」という授業のひとつとして行われたものでした。

講演の中で中村解説委員は「ニュース番組には記者やカメラマンだけではなく、スタジオの照明、美術、音声、技術など

数多くのスタッフ関わっています。そして、キャスターは視聴者の皆さんに情報を伝える最終伝達者として重要な役割を担っています」と説明。一方、生徒の皆さんには「ニュース番組に出演して正しく原稿を読むことはもちろん大事ですが、それ以外の時間に何をするのがもっと重要です。様々なことに興味を持って疑問を持つ。そして多くの人に直接会って、自分の耳で聞く。皆さんにも是非実践してもらいたい」と、見えないところでも努力することの大切さを訴えかけていました。

この日の授業には若水中学校の2年生の生徒106人が参加。質疑応答の時間では、「アナウンサーになったきっかけ」や「人前で緊張しないようにするにはどうすればよいか？」などの質問が出るなど、予定時間の45分があっという間に過ぎて行きました。



中村昌秀解説委員の講演

被災地支援の取り組み

東海テレビでは、岩手県をはじめ東北地方の被災地支援も重要な活動のひとつと位置付けています。

この1年も番組制作や、岩手の関係先を直接訪ね、支援の取り組み内容を報告しました。

被災地での活躍を目指して

「じゃがいもコロコロ

～災害救助犬への長い旅～

2015年1月25日(日) 16:30 - 17:30 放送

報道部 藤井章人

「捜せ！」岐阜県富加町の山間に女性トレーナーの声が響くと、黒い犬が颯爽と走り出す。名前は「じゃがいも」。自慢の嗅覚でがれきの中に取り残されている人を捜す。じゃがいもは「災害救助犬」の候補生だ。

東日本大震災後、被災地から45頭の犬が岐阜の訓練所にやってきた。その中の1頭がじゃがいも。「被災地生まれの犬が、災害救助犬を目指す」。2012年秋の初挑戦から重ねた取材。しかし、試験は不合格の連続。取材開始から2年余りが経過した。

取材中、被災地の犬の死に直面した。震災からの時の流れ。共に暮らした平穏な生活を、あの日、突如奪われた犬と飼い主。今なお離れ離れの生活が続く。岐阜にいるそれぞれの犬の向こうに、原発事故の影響で以前の生活に戻れないままの被災者がいる。

「うちから全ての犬がいなくなったとき、被災地が復興したのかな」、訓練所の代表の言葉。犬たちが、そしてその飼い主たちが故郷に戻る日はいつになるのか。被災地から遠く離れた岐阜の訓練所を通して、今後も被災地を見つめ続ける。



被災地とつながる窓として

岩手支援委員会事務局 野瀬義仁

2015年6月。

岩手県盛岡市の中心部を流れる北上川。開運橋から岩手山をのぞみながら盛岡城址近くのJAそして岩手県庁へ。2011年8月以来、岩手県を訪れるのは何回目になるだろう。岩手支援委員会事務局は、番組やニュース取材の調整、復興支援イベントへの協力等、「びーかん問題」で迷惑をおかけした岩手の関係者と当社の各部署をつなぐ窓口として活動しています。4年たった今、当社の取組みは岩手の方々からも少しずつ評価してもらえるようになってきました。今回の訪問でも「誠意は十分に感じています」と関係者から伝えられました。そして「災い転じて福となすにしていきたいと思います」と。

あれから4年。

東日本大震災の被災地では、いまま懸命な生活再建、ふるさと復興への努力が続けられています。岩手支援委員会事務局は、これからも被災地に寄りそった支援を続けていくために、岩手県と当社をつなぐ役割を果たしていきます。

そして8月。

この1年間の当社の取組みを報告するため、再び盛岡へと向かいます。いつも岩手を訪れるたび、被災地に立つたびに、思いが新たになります。



コンプライアンス・放送倫理意識の醸成を目指して

「ぴーかん問題」を起こして以降、東海テレビでは

放送人として身につけておくべきことを再確認する場を随時設けています。

この1年も、コンプライアンス責任者会議やオンブズ東海を開催し、東海テレビ、東海テレビグループ、協力会社の関係者を対象にした放送倫理研修や放送人研修をはじめ、各部署で勉強会を実施しました。

コンプライアンス責任者会議

2013年秋に立ち上げた「コンプライアンス責任者会議」は、原則3カ月に1回開催しています。コンプライアンス責任者を担う各部部長に加え、東海テレビのグループ会社の担当者も出席し、東海テレビグループ全体で情報の共有と意識の向上に努めているところです。各部であったトラブル案件やヒヤリ・ハット事例、さらには法律・法令の再確認など、放送局の業務に関連する様々なテーマを取り上げています。こうした事例を共有することで、再発の防止につながるるとともに、時々刻々と変化する放送を取り巻く社会環境に適正に対応できるよう、理解を深める場としています。



オンブズ東海

コンプライアンス責任者会議での議論は、東海テレビの放送やイベントをチェックする第三者機関「オンブズ東海」に報告されます。オンブズ東海ではこのほかにも、視聴者から寄せられた意見や苦情、BPO(放送倫理・番組向上機構)が取り上げた事例も議論のテーマにしています。経済・学術・法曹出身の3人の委員に、それぞれの立場から、社内では見逃してしまいがちな問題点を厳しく指摘いただいています。



オンブズ東海 委員長
神尾 隆氏
公益財団法人
名古屋国際センター
評議員



オンブズ東海 委員
河村 雅隆氏
名古屋大学大学院
メディアプロフェSSIONAL
コース 教授



オンブズ東海 委員
橋本 修三氏
橋本法律事務所 弁護士

放送倫理を考える日

2014年8月4日、東海テレビが定めた「放送倫理を考える日」に全社集会を開催しました。冒頭、内田社長が『「ぴーかんテレビ」の不適切テロップを実際に見た時の衝撃は、3年たった今も鮮明に記憶に残っている。この不祥事は東海テレビが存続する限り、背負っていかねばならない重い十字架で、決して忘れてはいけないことだ」とあいさつしました。集会では、8部署の代表が7月の「放送倫理を考える月間」で話し合った内容を報告、「視聴者に優しい番組作りをする」「視聴者だけでなく、街で出会ったすべての人に親しまれる番組を目指す」「配慮謙虚さを忘れず取材する」「番組を見る人がどう感じるか、想像力豊かにして仕事をする」など、再発防止の決意を新たにする機会としました。



放送倫理研修会

BPO＝放送倫理・番組向上機構の委員を招き毎年開催している「放送倫理研修会」。2015年は放送人権委員会委員長代行の奥武則氏を講師に、1月15日に開催しました。研修会には東海テレビの役員・従業員やグループ会社従業員、さらに制作会社など協力会社スタッフなど309人が参加、2014年6月、放送人権委員会が公表した「顔なしインタビュー等についての要望～最近の委員会決定をふまえての委員長談話～」の内容を中心に、講義が行われました。

顔なしインタビューをめぐるのは、「顔を出すことは、場合によっては本人のプライバシーの侵害につながる可能性がある」とする一方、「本人を特定できないインタビューは信ぴょう性に欠ける」とそれぞれの問題点が指摘されています。さらに、ソーシャルメディアの普及などに伴い、映像が次々転載される今の時代は、特に慎重な対応が求められています。こうした現状を踏まえ、奥代行は、安易な顔なしインタビューがテレビの信頼性を低下させるおそれがある、としながらも、顔なしインタビューを完全に否定せず、必要な場合は徹底した加工で、プライバシーを保護することが大切であると訴えました。

研修会終了後参加者から、「どういう場合に加工が必要か様々な場面を踏まえ、番組制作したい」「顔出しで取材対象者の不利益になることもあり、必要な場合が多くあるはず」という意見もあり、インタビューのあり方について考えるきっかけとなりました。



放送人研修会

一方、放送人として身につけておくべき心得などについて、外部の識者や放送界の関係者などから話を聞く「放送人研修会」を、2015年3月23日に開催しました。今回は、ドラマ「北の国から」、最近では「若者たち2014」の演出を担当したフジテレビエグゼクティブ・ディレクターで、日本映画衛星放送代表取締役社長の杉田成道氏を講師にお招きしました。今回の研修会は「なぜテレビは面白くなくなったのか」。この中で杉田さんは、テレビが面白くなくなった理由のひとつとして「コンプライアンスが制作者の創作意欲をそいでいるためではないか」と指摘。その一方で、「面白さは作り手のエネルギーによって、見る側の想像を超えたときに生まれる」「基準は自分自身が作るべきもの」など、40年余りにわたり演出家としてドラマ作りに携わった放送人ならではの哲学を披露いただきました。



講師 杉田 成道 氏
日本映画衛星放送
代表取締役社長

参加者の主な意見

- 面白いものを作ることとコンプライアンスを考えることとのせめぎ合いは、常に考えていかなければならないことだと思った。
- コンプライアンスは重要だが、クレームを恐れるあまり、無難な番組作りに走るのはテレビの魅力を自ら下げているように改めて思った。
- テレビを面白くなくしているのは時代ではなく、我々の中にある「守り」の気持ちであると痛感した。
- コンプライアンスが厳しくなり、視聴者のテレビ離れが進み、テレビ業界は今が頑張らないといけない時期なのだと改めて実感した。
- 面白いものを作るためには、予想を裏切る展開を作ること、批判を予想すること、その批判の返答を想像することなど、視聴者の想像を超えていく力があれば、きっと面白いものが作れるのだと思った。

第三者意見 I

公益財団法人名古屋国際センター評議員で
オンブズ東海の委員長を務める神尾隆氏にご意見をいただきました。

2011年8月4日、「ぴーかんテレビ」で放送された不適切なテロップで、東海テレビが1958年の開局以来、長年積み上げてきた信頼を一気に失うことになったのは、今も記憶に新しい。

東海テレビは、再発防止策を社側に提言する再生委員会を立ち上げ、2012年1月には第三者機関・オンブズ東海を設置、私はその委員長に就任し3年余りになる。その後、オンブズ東海は再生委員会の機能を引き継ぎ、新たに設置されたコンプライアンス責任者会議の議論に対しても意見を述べてきた。

東海テレビは「番組で失った信頼は番組で取り戻す」という不退転の決意のもと、毎年8月4日を「放送倫理を考える日」に制定した。私は、全社集会や各種研修会の場にオブザーバーとして参加しているが、トップをはじめ全社員、そして関係者が会場に溢ればかりに集い、放送倫理・コンプライアンス意識の浸透に向けた取り組みの報告や、講師を招いた研修会での活発な質疑など、全社を挙げた真摯な姿勢に“新生”への意欲を肌で感じている。トップから全従業員、関係者一人ひとりに至るまでが危機意識を持ち続けることこそが、社内の風土を変革する力になると確信している。「継続は力なり」「健全なる危機意識は健全なる企業にこそ宿る」、これが私の信念である。

危機管理というと、ともすれば“守り”のように考えがちだが、危機を察知し、先んじて対応することこそが将来への展望を開く“攻め”の取り組みだと信じる。マネジメントに当たる人、自身の仕事の中で危機管理を実践できる人、そうした人材の育成とともに、生き生き働ける仕組みづくりや現場づくりが大切だと思う。

私自身が長年仕えてきたトヨタの中興の祖と言われる故豊田英二氏は、「人材こそが経営の要であり、企業の盛衰を決めるのも人材である。人がモノをつくるのであるから、モノをつくる人をつくらなければ仕事は始まらない」と人材育成の大切さを説いている。また、モノづくりの現場で問題が生じた場合、「まず先入観を持たず、その現場をよく観察せよ。そして問題に対し『ナゼ!ナゼ!』を5回くり返せ。原因の向こうに、必ず真因がある」と、モノづくりの現場における危機管理の大切さを説いている。

“番組”づくりと“モノ”づくりに違いはあるかも知れないが、「番組で失った信頼は番組づくりで取り戻す」という決意を形にするためにも、初心に戻り、“危機意識の継続”を実践し、「新生東海テレビ」としての発展を祈っている。



神尾 隆氏

オンブズ東海 委員長

1942年生まれ。三重県鈴鹿市出身。慶應義塾大学商学部卒業後、65年、トヨタ自動車工業(現トヨタ自動車)入社。生産管理部、広報部などを経て、96年取締役、03年専務取締役渉外・広報本部長などを歴任。05年から10年まで東和不動産取締役社長。現在は公益財団法人名古屋国際センター評議員、NPO法人ささえあい理事長などを務める。

視聴者からのご意見

—社外モニター懇談会から

東海テレビでは「社外モニター制度」を実施し、モニターから寄せられる貴重なご意見を番組作りに生かしています。

東海テレビでは、視聴者から弊社が制作・放送する番組に対するご意見をいただく、「社外モニター制度」を実施しています。社外モニターの任期は半年で、東海地方に住む18才以上(高校生は除く)の方に、自社制作番組をご覧いただいています。

2014年度下期のモニターは20歳代から50歳代の男女計10名で、10月から半年間に放送した26の番組について意見を頂戴しました。

そして、任期終了時にモニターの皆さんとの間で開催した懇談会では、東海テレビ、そして放送局全体に対する「生の声」を伺うことができました。



東海テレビに対する意見

30歳代女性：自社制作など新しいアイデアを出してくるチャレンジする局だ。

50歳代女性：最も地元のテレビ局というイメージが強く、身近な局だ。

30歳代女性：ドキュメンタリーなど時間を忘れてじっくり見ることができる番組が多いテレビ局。

50歳代男性：昔はキー局のフジテレビと一緒に勢いがあったが、最近は他局と大差なくなってしまった。

テレビ放送全般に対する意見

50歳代女性：多くのメディアが出てきましたが、テレビは一番身近だと思うので期待したい。

20歳代女性：タイトルと内容のイメージが合致しないものがあり、わかりにくい。

30歳代女性：子どもと一緒に見たい番組、見せたくない番組があるので放送の時間帯を配慮してほしい。

30歳代女性：家族全員で見て話し合ったり、落ち着いた気持ちで見ることができる番組を見たい。

社外モニター制度は、視聴者の率直な意見を聞くことができる大事な制度です。

今後も引き続き、モニターから寄せられる貴重なご意見を番組作りに生かしてまいります。

この1年の主な取り組み

2014年

- 7月 放送倫理を考える月間
- 8月 4日 放送倫理を考える全社集会
- 8月 6日 内田社長 岩手訪問(～7日)
- 8月27日 第4回コンプライアンス責任者会議
- 9月 2日 「オンブズ東海」第11回委員会
- 9月18日 2014年日本民間放送連盟賞
特別表彰部門「放送と公共性」で「ドキュメンタリー映画とテレビの未来」が最優秀賞、
番組部門「テレビ教養番組」で「熱中コマ大戦～全国町工場奮闘記～」、
CM部門「テレビCM」で、公共キャンペーン・スポット「震災から3年～伝えつづける～」、
「職人の町の玄関口～中部国際空港～」が、それぞれ優秀賞
- 10月25日 わんだほ感謝祭2014(～26日 来場者17万2412人)
- 10月27日 改正「東海テレビ 放送基準」説明会(～11月6日 計8回開催 受講者283人)
- 10月31日 公共キャンペーン・スポット「震災から3年～伝えつづける～」が
2014 54th ACC(一般社団法人全日本シーエム放送連盟) CM FESTIVALで「ゴールド」受賞
- 11月20日 第5回コンプライアンス責任者会議
- 11月20日 著作権侵害に関する説明会(～12月3日 計17回開催 参加者342人)
- 12月 2日 「オンブズ東海」第12回委員会

2015年

- 1月15日 「放送倫理研修会」 講師: BPO人権委員会委員長代行 奥 武則 氏 (参加者309人)
- 1月19日 著作権侵害に関する説明会(～1月20日 計2回開催 参加者52人)
- 2月19日 第6回コンプライアンス責任者会議
- 3月 3日 「オンブズ東海」第13回委員会
- 3月23日 「第4回放送人研修会」 講師: 日本映画衛星放送社長 杉田 成道 氏(参加者232人)
- 5月22日 第7回コンプライアンス責任者会議
- 6月 2日 「オンブズ東海」第14回委員会
- 6月 2日 公共キャンペーン・スポット「震災から3年～伝えつづける～」が
第52回ギャラクシー賞CM部門の大賞、
ドキュメンタリー「ヤクザと憲法～暴力団対策法から20年～」がテレビ部門の選奨をそれぞれ受賞

第三者意見Ⅱ

上智大学文学部新聞学科教授で

弊社社外アドバイザーの音好宏氏にご意見をいただきました。



音好宏氏

上智大学文学部新聞学科教授

北海道札幌市生まれ。1990年上智大学大学院文学研究科新聞学専攻博士課程修了。日本民間放送連盟研究所勤務後、1994年より上智大学専任講師、その後、助教授を経て現職。専門はメディア論。

2015年6月2日、東京・恵比寿のホテルを会場に開催された第52回ギャラクシー賞贈賞式において、ギャラクシー賞CM部門の大賞作品に東海テレビの公共キャンペーン・スポット「震災から3年～伝えつづける～」が選ばれた。CM部門の大賞作品に、放送局のキャンペーン・スポットが選ばれたのは、初めてのことだ。ギャラクシー賞を主催するNPO法人放送批評懇談会選奨事業委員会・稗田政憲CM部門選奨委員長の講評では、「あの日・あの時を忘れてはいけない、との思いから震災の被災地にカメラを向け、その現状を『公共キャンペーン』として紹介し続けたことが高く評価された」と今回の受賞を解説した。このCMに登場するのは、被災者への微妙な取材に苦悩する若手記者や、それをサポートするベテランスタッフの姿だ。そのリアルなやり取りを、遠くから撮影した映像でこのCMは出来ている。

あれから4年。社内の関係者のなかには、このCM企画を見て、不適切テロップ問題を思い浮かべる視聴者が出ることを想像し、躊躇の思いがよぎった人もいただろう。そこをあえて踏み込み、メディアに課せられた「伝え続ける」という使命感、事実を追うことに対する真摯な姿勢を継続することこそが、視聴者との信頼を得ることにつながることを愚直に示そうとしたことが、この作品の力であり、魅力でもある。

ところで、放送批評懇談会の理事長を務める私のところに、今回のCM部門の審査結果の報告が届いたのは、贈賞式の直前であった。理事長と言っても、私自身は、一切、審査には関わることがないのだが、役職上、リスク管理の観点もあって、受賞作品は贈賞式前にその内容を全て確認をする。私自身、そこで初めてこの作品に触れることになるのだが、その最初の感想を申し上げれば、この作品は、第一義的には、視聴者に東海テレビの報道・制作への姿勢を示すものだが、それ以上に、今回の作品は、東海テレビが自らの教訓を、自ら再確認するものとの印象を持った。

東海テレビには、毎年、どんどん新しい人材が集まってくる。これまでのスタッフはもちろんのこと、その新しい人材とともに、自らの姿を確認することは非常に大切なことだ。

今回のキャンペーンCMはもちろんのこと、オンブズ東海の活動、放送人研修会、放送倫理研修会、放送倫理を考える集会、そして、この「この1年の取り組み」にまとめられた活動など、その1つ1つが、自らを顧みて、明日につなげる力となるはずである。

東海テレビに関わる一人一人が、その矜持、その高い倫理性を再確認し、堅持し続けていただきたい。

おわりに

本報告を最後までご覧いただきありがとうございました。

放送局が最も重視すべき責務は放送の継続です。

ニュース、バラエティ、ドラマなど多様なコンテンツを提供し続けることで、視聴者の皆様のご要望に応じていきたいと思っています。

また、有事の際の災害情報、安否情報などを提供するライフラインとして、この地域に役立つ放送局を目指してまいります。

◎お問い合わせ先

東海テレビ放送株式会社 コンプライアンス推進部

〒461-8501 愛知県名古屋市東区東桜一丁目14番27号

Tel. 052-951-2511(代表) ホームページ <http://tokai-tv.com/>

発行年月 2015年 8月 ※文中の所属・肩書については原稿作成時点のものとなっています。

東海テレビ放送株式会社